

泥棒とイーダ

第01回 命の恩人は黒装束!?

牧田真有子

「なつかし」

「何だっけ。ノスタルジ的な意味とは違うんだったよね。待って、思い出せそう」

私は目を閉じて指で眉間をもんでみた。昨日授業で覚えたはずの古文単語は、たしかにまだ遠くまでいっていない。どちらかといえば、目の前にある、裏返ったカードみみたいだ。でも手が出ない。私の内側にありながら関係できない。思いきり「手」を伸ばそうとすると、自分がいきなり澄んでしまうような感じがした。

どこかで犬が低く吠えた。川風は軽く湿っていた。

「これ以上待ったらあんたの眉間からおかしな煙が出てきそう。①親しみやすい、②心ひかれる様子だ、慕わしい」

高らかに読み上げると、チカは颯爽と単語集を閉じた。「もうちょっとで思い出せそうだったのに」と自分でも真偽のわからないことを言いながら、私も埃っぽい腰掛から立ち上がる。

週に一度、古文の単語テストの前日は放課後、チカと川原のあずまやでかわるがわる問題を出し合うのがならいになっている。家に帰ってまで勉強する気にはなれない。私たちは夕暮れの土手の上を自転車で走った。川は暗い青に染まって平たく流れ、対岸の景色はゴルフの練習場から雑木林へ、高くほっそりとした煙突が何本も並んだ工場へと移ろった。煙突から出てきたばかりのような格好で小さな月が浮かんでいる。「あらまほし」「いまめかし」「はかばかし」「ひがひがし」「まめまめし」覚えたばかりの形容詞を私たちはふぎけて口々にとなえた。すれちがった、恋人らしい二人組が、呆れたように微笑み交わすのがわかった。

記憶力は人並みだと思う。ただ「私が思い出した一瞬はどうしても私の記憶にはない」ということの憂いと白熱を経験する頻度は、平均的な高一よりたかいかもしれない。私はかつて間一髪で命を救われた。けれど幼すぎたから片鱗も覚えていないのだ。

堤からゆるやかな弧を描いて曲がる坂道の裾に、きりつとしたアイスクリーム店がある。ところどころ放心しきったようなこの郊外の小さな街にあつては突出した魅力を持つ。ここに立ち寄るのももう恒例だった。白と芥子色と黒できりりと統一された店内にはテーブル席もあるが、私たちは道に面して開かれた窓口からアイスを買って自転車にまたがったまま味わう。似たところの少ない二人だけれど屋外好きは共通だ。

店の外壁に備え付けられた白熱灯の照明器具が、光で、それ自身の形を投影している。

「あ、ペットボトルさっきのところに置いてきた」

スクールバッグに大人びたデザインの財布を戻してチカが呟いた。

「取りに戻る？」

「ううん、もう空だったし」

端的に短いスカートから足を投げ出し、チカはあつさり笑んでアイスクリームを舐めた。クセのある短髪が似合うきわめて中性的な顔立ちと、それを裏切るようにグラマラスな体つきとのバランスは、ある種の光沢みたいだ。皆と同じ制服を着ていても、彼女を意味ありげに浮かび上がらせる。ほどなく鳴り出した携帯電話に彼女は出た。掌の温度でブルーベリーアイスが溶けていくのを平然と眺めながらチカは気安げに話を続けている。相手が喋っている間に舐めたりもしない。彼女はびっくりするほど友人が多い。

「ごめんごめん」

私にかアイスにか、景気よく謝りながらチカが携帯をスカートのポケットに突っ込んだので、我に返った。自転車にまたがって待つあいだ中、私は白い漆喰壁に落ちた仄暗い影の形を見ていたらしい。それを白

ペンキで塗りつぶすことばかり繰り返し想像していた自分に、ちよつと
うろたえた。

いつもの辻まで来て、「うし」「こころにくし」と手を振り合つて別れ
た。彼女の後姿が角を曲がるのを見届けてから私は自転車の向きを大い
に変えた。もと来た道をもくもくと戻つて川原に出る。

風に倒されたらしくペットボトルはずまやのざらついた床に転がっ
ていた。拾い上げて見直し、分別のゴミ箱に放り込む。途中に川を挟ん
で一列につらなる鉄塔、その間の電線が夜風になつて大げさな音を立
てた。長い橋の上をとる車の数はまばらだ。

こういうことをいつもするわけではない。私はただなぞっているだけ
なのだ。自分がここにいることの「理由」からあんまりずれてしまわな
いために。つじつまを合わせるように。頭皮の裏側へ、しびれるような
感覚が静かにはりついていて。私は自転車を飛ばした。アイスクリーム
屋の角を曲がり、暗い竹林沿いの道を突っ切る。

竹林の半ばに立つ旧家の屋敷脇を通り抜けようとしたとき、私はふと
見えない何かをとらえて、速度をゆるめた。実際に物音がしたのか、濃
厚すぎる気配を察しただけなのか、自分でもわからない。その解明があ
まり安全な選択肢でないことだけはたしかだった。目を細め、延々とつ
づく生垣越しに眺めると、立派な門灯は点いているが母屋にはほとんど
明かりがない。身を硬くしてペダルを踏む足に力をこめた。

「誰かいるみたい」

少し離れたところからだしぬけに幼い女の子の声が聞こえたのと、く
つきり痩せた若い男が途轍もなくそうつと生垣の隙間から抜け出てき
たのと同時だった。反射的に凝視した。薄い眉にかかる黒い前髪。見る
者を押し返すようなきついまなざし。屋敷の人間ではない。私の知り合
いだ。私は思わず「あれ」と言い、佐原^{さばら}さんは妙に陰気な驚愕の表情を
浮かべた。「お母さん、ねえ誰かいるみたい」ともう一度生垣の向うか
ら女の子の声があった。枝葉を掻き分けた格好の佐原さんは「俺にこがせ
る」と一瞬で言い、数秒後には私は華々しい速度で風を切る自転車の後

輪の軸に立っていた。

街灯の下を通ったとき、彼が黒装束であることに気づいた。バックパックまでどす黒い。佐原さんはなにやら一心だった。カーブで自転車の持ち主を畑に振り落としても気づかなさそうなので、意外と堅牢な彼の肩にどうにか指を食い込ませた。やむなく瞠った目に夜がどしどし映る。最初の角で、案の定ブレーキもそこそこに曲がると、彼はまっしぐらに駅前繁華街を目指した。

私は陸橋のたもとでやっと自分の自転車から降りることができた。膝がちよつと震えていた。私たちを追い越した中年男性が傍のスナックのドアを押し開けると、中からカラオケの演歌がどきどきと流れてきて再びくぐもる。繁華街といっても枯淡なものだ。ネオンさえ、通りを盛り上げるよりは、行き交う人々に互いの顔の中の悲しみを発見させるのに一役買っていきそうな風情だ。

佐原さんは額に浮かんでくる汗を黒い長袖のTシャツでしきりに拭いている。小さな四角い爪だと思った。今年で二十九のはずだ。どこか奥ゆかしい品のある顔立ちに、そこはかとなく暴力的な表情を重ねたややくしい容貌の彼は、在宅で書籍の校正の仕事をしている。スクールバッグを左肩に掛け替えて私は言った。

「あそこで何やってたの」

「ちよつと用事があって」

お茶を濁すせりふはお茶を濁す声音で言うものだとばかり思ってきたが、彼はまだ少し乱れている息遣いの合間に、ずばりと言った。いつ聞いても、乾燥していて嵩のある声だ。私もそれ以上問いただすつもりはなかった。彼がそう言うなら善き用事だったはずだし、彼が生垣の間から憔悴しきった様子で出てきたならそれに見合うだけの価値ある行為がこの世に送り出されたはずだからだ。佐原さんは「じゃあ」と踵を返し、私は手を振って自転車をこぎ出そうとした。

「亜季」

彼はふいに大声で私を呼びとめた。近づいてきて、ポケットから出し

たくたくたの一万円札を握らせる。

「何これ」

しわを伸ばしながら訊いた。佐原さんは何も言わなかった。赤いネオンがまわしたてるように瞬いていた。

「おこづかい？」

私は笑って彼の目を覗き込んだ。彼はあらぬ方向を見遣った。そしてそのまま、陸橋の階段をのぼり、見えなくなった。口止め料と瓜二つのおこづかいは折り畳んで生徒手帳に挟んだ。一円玉でもよかったのに、と思う。佐原さんがくれるものなら何でも大事すぎて、どうせ使えないのだ。

彼に私は命を救われた。そのことに疑いをさし挟む余地はない。私が覚えていないだけだ。なにしろ二歳になる直前のことだったから。ようやく歩けるようになった頃で、両親に公園へ連れていってもらう途中だった。その対岸の道で母は古い知り合いと出会ってお喋りにのめりこみ、父はうんざりしてあさつての方向を見ていた。ふしぎに音もなくトラックがカーブしてくる。漂うように道を渡りかけていた私に、両親も運転手もぎりぎりまで気づかなかった。学校帰りに通りがかった十五歳の少年だけが目撃した。彼は我が身をその場から幼児めがけてすっ飛ばした。右肩をアスファルトに打ちつけて複雑骨折し、頬も十針以上縫う大怪我を佐原さんは負った。

……色んな人から聞いた話を継ぎ合わせただけの、精度の低い映像だ。もしあのとき佐原さんが通りがからなかったら私はいない。たとえその直前までは生きていたとしても、自分を自分だとわかっていない存在を私とは呼びにくい。誰のものでもないそんな命は、ただ直接に世界のものだったのだろうか。この世を心に映すこともなく完璧に含まれて。

小さいときから、そう思うたび心が裏返りそうになる。古びてはいるがまだ一度も読んだことのない絵本を繰るように、ない記憶をひらこう

としてしまう。

しかし佐原さんの行為に関しては、たとえ覚えていなくても曇りなく信じられる。

当時でこそ他の面で注目を浴びることの方が多く人だったら嬉しいが、ものごころついて以来の私の目に映る彼はもっぱら、過激なまでの正しさと優しさに縁取られていた。喫煙している高校生がいれば煙草を高々と取り上げ、不法投棄物を見かければ着衣のまま川に突進して引き上げ、迷い犬がいれば飼い主を探して一軒一軒訪ねまわる。

たまに行われるなら賞賛されたかもしれないことも、恒常化すると話は別だ。妖気あふれる善行は時にトラブルの発端ともなる。その都度佐原さんは殴られたり思いきり殴り返したり、泣かれたり凄んだりしている。説教も弁解もない。口数の多い人ではないのだ。腕つぶしがつよいことは間違いない佐原さんが——進級するたびクラスをことごとく崩壊させた経歴をもつ彼は、少年時代は無論そちらの方面で有名だったらしい——仔犬とうつろな沈黙とをたずさえて血走った目で玄関の戸口に立っていたら、たいていの人は精神的に追い詰められると思う。

きちんと勉強して臨んだのに散々な点数を載せて返って来た答案用紙は、小さく畳んで捨てた。持っていたって心温まる機会には結びつかないはずだ。他の教科は、それほど真摯に取り組まなくてもそれほどたらしめな点数をとることはない。でも数学だけは、そういうさためであるかのように駄目だ。何時間勉強しても、しなかったのと大差ないしろものを提出するはめになる。

辛くて私は生徒手帳をひらく。一日の最後の授業も済み、ホームルームのため担任が教室に来るのを待っている短い時間だった。手帳カバーの折り返しのポケットに挟んだ一万円札を取り出して手に載せていると、辛さは少しずつ溶けた。皺だらけのこの紙幣のやわらかな手触りを、佐原さんも知っている。かつて私の命を掴んだあの手が触ったのと同じものを触っている。

「お金持ち」

「何か奢って」

私の机の傍らを通りがかった男女の級友がひやかしてきた。

「これ観賞用だからむり。むしろ実用の貸してほしいくらい」

私が言うと彼らの片方は「俺のも今ぜんぶ床の間に飾ってあってさあ」と言い、二人は朗らかに笑いながらすり抜けていった。

担任が大量にコピーされたプリントを胸の前に抱えて入ってくると、「先生今日は早く終わろう。約束あるんだってほんとに」

紙幣を掛け軸にするという異常な趣味の彼が、椅子にふんぞり返って馴れ馴れしく声を上げる。担任は「それはちよつと」とはにかむように口ごもり、プリントを列単位に配布した。声の小さいおとなしい女の先生だが、くしゃみやしゃっくりでは不敵な音を立てる。教壇でテキストを読み上げている最中に、太ももの引き締め効果が期待できそうな「ながら体操」めいたものを実践するなど、部分部分はダイナミックな人だ。物品の数え方も同様で、最前の人から順に回ってくるプリントはたいはいその列の人数を超えている。

後ろから二番目の席の私は余った一枚を教壇に返して自分の席に戻った。他の列からも、やはり枚数間違いが歴然とする辺りの席順の子がちらほらと漂い出ていた。誰かがカーテンを開け、なだらかな山の斜面が見えた。着席するなり肩をたたかれて振り向くと、「なんかいつもごめんね」と少し眉をひそめた史乃しのが肌理の細かな白い顔を寄せてきた。とくべつに美人ということはないが、とくべつ緻密に仕上げられたようなデイトールの持ち主だ。可憐な雰囲気のせいかな、普通の男子生徒よりやや高いほどの背丈やそれを支えるのびやかな骨格を、あまり感じさせない。

「回してくれていいよ。私が返しにいくから」彼女は言った。

「いいよ、そんなの」

私は少しびっくりして言った。

彼女とはクラスで唯一出身中学が同じなのだが、私たちの間柄にはい

つも何か、質感として完成しない迷いのようなものがあつた。それは相性の問題というより彼女が一方的に気を遣っているせいだと、最近わかつた。

すつと浮かんでいってしまいそうな軽みのある、きれいな面差し。クラス単位の催し物などを決める際、「その他大勢」の無言に溶けてしまわずさりげなく自分の意見を言い、それに固執することもないひらかれた姿勢。人気のある彼女に気を遣ってもらう理由などないので、長らくびんとこなかつたのだ。

「あの先生どうして八枚を七枚つて数えちゃうんだらうね」

史乃は私の顔色を窺うように言った。長い黒髪が肩から流れた。

「あるいは先生にだけ八人目が見えてるんじゃないといいけど」

私が言うと史乃は準備していたように整つた形の悲鳴を上げてみせた。

「けぎやか」

「すくよか」

「たおやか」

「おでん」

「ココア」

「熱爛」チカは含み笑いの声になり、私も、いいかもねと言ってみる。対岸の工場の巨体にずらりと小さな蛍光灯が点いている。両足で踏みしめるのも、今みたいに自転車でも、ゆるく湾曲した長い土手の上を走るのは好きだ。川の形に沿って移動する間は、それと自分が遠いところでしたっかりとつながっている気になる。

屋敷の生垣から暗い目をして抜け出してきた佐原さんと会って二週間余り経ち、十月に入った。あずまやもすぐ青い闇にのみこまれる。夏と同じペースで暗記しては視力がするする落ちていきそうなので、二人の集中力はやむを得ず向上した。

かわるがわる突き出す膝に夕暮れの涼しい風が流れる。土手の草む

らは前のめりの姿勢で暗緑色になっていく。店内に入らず看板の一環みたいな体裁で舐めるアイスは従来の魅力を失いつつあった。来るべき時節に備え、冷菓の代替案を模索しながらアイスクリーム屋をきりりと素通りした二人は、コンビニの前でフライドポテトを分け合う点で合意した。

チカはビジネスマンが使いそうな薄い黒無地のスケジュール帳をめくった。中身は絢爛で、何某と遊園地に行くとかテストの日取りとか何某との映画だとかが無限の色彩を駆使して書き込まれている。

以前放課後の渡り廊下でこの手帳を拾ったのが、出身中学もクラスも異なる彼女と仲良くなったきっかけだった。持ち主の判定のため、うるめたさに引つ張られながらもページを繰った。まだ手帳の使用が始まって間もない五月なのに、たくさんの人の誕生日が先々に渡って記されているせいで、ここから遠い時間にまで活気が行き渡っていた。貼られたプリクラに共通して写っている顔を頭に叩き込み、四月の欄の内容から絞り込んだクラスに行ってみた。その教室の窓からは中庭の柳が見えた。彼女はきよとんとしてから深々とよるこんでくれた。手帳をひらいたことを低く詫びると、名も知らない彼女は椅子から立ち上がって、名も知らないはずの私を抱きすくめた。引き締まっているが弾力のあるその体はパツと離れ、棒立ちの私に誕生日を尋ねた。

チカが油のついていない指で十一月のページをひらく。

「亜季、来月誕生日だね。どっか行く？」

「ありがとう。むしろチカが来てくれない？ その週末の日曜、空いてたら。昼食とかケーキは用意してあるから手ぶらで来て。開始時間は正午」

「開始時間？」

「お誕生会の。ほら、親が企画運営して、子どもの友人たちが家に招待されて、皆でケーキ囲んでクラッカー、というタイプのあれが、今も連綿と続いているもので」

家族の話をほとんどしない私とそのパーティーとがすぐには重なら

なかったらしい。チカは暗算の最中にいきなりカメラを向けられたような、めずらしい形の微笑を浮かべて「クラシックじゃん」と言った。車道を挟んだ向かいの道では背の高い男が一人、淡いダンスを踊っていた。通行人めがけて空き家の軒先から腰低く歩み寄り、紙を差し出しながら話しかけては無視され、また陣地にふわりと戻る。舞っているつもりはないのだろうが、長い手足をぶらぶらさせるさまはどこかパフォーマンス的だ。ことごとく彼の目的が達せられないため、アンケートや署名運動の類いかビラ配りなのかすらはっきりしなかった。私はチカの目を見て言った。

「でしょう。ちよつと前まで参加者全員の頭に三角錐の紙帽子載ってたんだから」

招待する友人にびっくりされる率が年々高くなるにつれ、当たり前だと思っていたその風習に私はようやく疑いの目を向け始めた。思い返せば面妖なパーティーだったのだ。私が招く友人の顔ぶれは毎年がらりと変わったが、唯一、私でなく両親が招待する人物は十四年間一貫していた。佐原さんだ。彼はおそろしく寡黙に三角帽を被り、はしやぎすぎの児童らを取って食いそうな目で見据えたり、女子中学生まみれになりながら日本酒を飲んだりしてきた。知人の通夜に行くため翌日の誕生会は不参加の由、前の晩に佐原さんから連絡を受けた両親が、ためらわず開催日を延期したことさえある。私は自分が招待した友人たちにしどろもどろの電話をかけ続けねばならなかった。

それが誕生会という名の、「この命に恩人があるということ両親が胸に刻み込む会」であると気づくのに、私は数年を要した。

中三だった今年の二月、あることがきっかけで両親の私に対する限界——「我が子は大事にしなれば」というゆるぎないコンセプトと、それに伴わない実感との空白——がめきめき浮き彫りになった。それまで私はごく人並みに父母を敬っていた。今この時だって感謝の気持ちはある。彼らは私を、大事にしやすい環境では全くスムーズに大事に扱ってくれるのだから。ただ環境の底が抜けて私だけずとんと落ちたとき、彼

らがそれに合わせて関わり方を変えてくれるわけではない、ということ
をあの頃私は思い知った。全てがいつのまにか元通りになるまで、彼ら
は決して降りてはこずに待つ。どんなに不自然でも平常どおり振舞いつ
づける。私個人ではなく元の空気の方を維持する。「そうやって待つて
いてくれる人がいるのはありがたい」と思うほど謙虚な姿勢で生きてい
るわけでない私はまっすぐ失望した。

そして佐原さんと自分とのことを考える時間がふえた。現在ではなく
十四年前の彼と私なので、思い出すことはできない。でも記憶にないか
らこそ、アスファルトの上で一瞬自分の命が佐原さんの命に彩られたこ
とを、実感しようとした。それはまれに私の意志を超えたなまなましき
を帯びる。現在の私の命まで照らされる感じがする。澄んだ灯りが体の
内のすみずみにまで行き渡っていくとき、ぼうっと煙る淋しさは散って
いく。

誕生会の機能を理解したのは、それからまもなくのことだった。

コンセプトと実感との隔たりがやけに大きいのは、父と母の昔からの
傾向だったのだと思う。ずっと私が気づかなかっただけだ。「せつかく
見ず知らずの少年が体を張って救ってくれた命だから、大切にしないで
は」というのは彼らにとって、空隙を埋めるのいうってつけの明快な根
拠となったのだろう。両親は年に一度、私というより佐原さんを軸とし
て宴をひらく。一年かけて少しずつひらいてきた空隙を是正し、新しい
一年にもあるべき姿を持ち越せるようメンテナンスする。中三の二月、
私はあつけなく失望したが、考えてみればこの誕生会なくしてはそもそ
も中三までまともに育てたかどうかかわからない。見ず知らずの少年に活
路を見出すほどの危機感を両親が自覚していたことは私にとって幸いだ
ったといえる。彼が一枚かんでくれたおかげで、私の命は不透明なもの
になったのだ。

菓草の匂いがぶんぶん漂っていた。日曜とはいえ昼前によく、パ
ジャマのまま階下へ降りた。独自にブレンドした葉でハーブティーを淹

れていた、趣味人の父が顔を上げた。

「今日は家だったのか、亜季」

「ちよつと風邪気味で」

おいおいうつすなよ、と父はさわやかで概念的な笑顔を浮かべた。私はうなずいて冷めたほうじ茶を啜った。何ということもない容姿の父だが、生まれつき栗色の巻き毛で、頭だけいきなり華やかだ。さりげなく譲られたように私も髪と目の色がすこし浅い。

強くなったり弱まったり音の変化に富んだ、まるで解読を待つ暗号のような雨が朝から降っていた。テールブルクロスにぼとりと置かれたゆで卵の殻を剥いた。体がだるく頭痛もする。父はパソコンで試作したらしい二種類のカードを私の前に並べた。

「招待状のデザイン、どっちがいいと思う？」

「別に要らないと思う」

「そう言うなよ」

「じゃあ両方使おう。もう刷らなくて済むでしょ。オレンジを佐原さんに、水色をチカに」

「今年は友達一人か」

「うん」

どうして一人なんだと追及されることは決していない。父は封筒の色に映える記念切手を探して自慢のファイルを繰った。コレクションでも全く物惜しみしないところは美質といえる。友人向けのカードは私が学校で配るのが常だが、佐原さんの方は父が郵送してきた。

「お父さん、今年は私が手渡しに行ってもいい？」

私は冷たいほうじ茶に湯を足しながら言った。あの夜は問いたただす気もなくあつさり別れたけれど、彼が本当は他人の屋敷で何をしていたのか訊いてみたい気持ちだが、にわかにはふくらんだのだ。典雅な前髪をかき上げて父は腑に落ちない目で私を眺めた。

「どこで渡す」

「逆に佐原さんのアパート以外のどこで渡すの」

父は彼のアパート名と部屋番号をアドレス帳から書き写してくれた。狭い街なのでおおよその見当はついている。

去年の誕生日に佐原さんがくれた深い緑のリネンシャツを羽織った。当人に会うときでもなければ惜しくて着用できない。わざわざ玄関まで見送りに来てくれた父は、「そうか、亜季に、風邪に効くハーブティ―を淹れてやればよかったね」と今さらひらめいていた。瑞々しいオレンジ色の招待状をビニールバッグの内ポケットに差し込んで私は家を出た。

たっぷり憂いを含んではいるが目抜き通りと称される駅前道に面して、しばらく商店街のアーケードがつづく。閉じた傘の先から冷たい水を流しながら私は歩いた。人通りはあるが買い物袋を提げた人は少ない。固く腕組みした青果店の主人が雨に見入っている。道にはみだす発泡スチロールの箱が次々白い。花屋の匂いがし、精肉店の匂いがした。アーケードの途中で狭い道へ折れ、傘をひらく。似たような造りの二階建ての古いアパートが連なっている。頭ががんとした。十月初めというのに、熱っぽいせいか寒気がする。メモの走り書きと同じ名前のアパートを見つけたときだった。立ちどまった私を叱責するようなベルを鳴らして追い抜いていった自転車から、何かが転がり落ちた。男児用の靴だ。後部座席に母親と背中を合わす格好で幼児が座っている。

「落としましたよ！」

大声を上げたら喉がずきんとした。濡れた靴を掴んで「靴！」とどなりながら雨の路地を走ったりなんかしたくなかった。

でも佐原さんなら確実にするだろう。

そう思うとどうしても無関係でいつづけられなくなって、透明な佐原さんをなぞるように、靴を拾って駆け出した。合羽の二人が乗った自転車との距離はなかなか縮まらなかった。私は傘を閉じて柄を握り、大きく腕を振った。片方は靴下だけの足をぶらぶらさせつつ、幼児は自分の靴の片方を手に追いつけてくる人物を愕然とした表情で見つめるばかり

で、何の手も打ってくれない。

「母親に知らせな」

カッとなり、声を荒げるとようやく聞きとがめた母親が自転車を止めた。彼女は私に礼を言うのではなく息子を叱り飛ばして走り去った。私は何だか不安に似たような心持ちで踵を返した。目当てのアパートまで戻ってきて外付けの階段を上ろうとすると、その最上段に不機嫌な顔の佐原さんが傘をさして立っていた。出どころがあのかぎっぱりした形の目とは思えない物騒なまなざしだ。見上げたまま私はたじろぎ、いつ気づいたのか問うた。商店街を曲がってきたときからだと彼は答えた。鉄製の階段は雨に打たれて硬い音を立てていた。佐原さんは言った。

「俺に助けられたこと、いつまでも根に持つてるんじゃないだろうな」

私は動けなかった。雨の中、彼の声だけがからりと乾いていた。

「ゆめゆめ、あれには縛られるな。死にたいときは死んでくれ」

〈続く〉

牧田真有子（まきた・まゆこ）

80年生。デビュー作「椅子」（『文學界』07年12月号）から一貫して、どんなことでも起こりうる世界と偶然ここにいる自分に戸惑う人物が、自己の座標を測りなおす瞬間を描く。ちよつとボンヤリした主人公とエキセントリックなパートナーのコンビが魅力。

早稲田文学・オン・ウエブ

copyright by Makita Mayuko 2012

published by wasedabungaku 2012